農業を営むキム・フンデさんとソン・インファさん

ロバに乗って 3色ブドウを食べようか 新鮮なセリを食べて デトックスしようか

緑真っ盛りの季節を過ぎて始興は今、実りの秋を迎えている。甘いブドウと桃が収穫の時期を迎え、戸曹原(ホジョボル)では稲穂が頭を垂れる。畑ではセリの収穫がたけなわで、市民農園利用者の手もせわしない。

新都市の建設と電鉄工事で慌ただしい一方、市全体面積(135㎢)の27%が田畑(37㎢)の始興は、首都圏で数少ない「生命都市」である。都市の人々が農業に触れることを願う農夫キム・フンデさんと、始興の長所を十分に生かして大農を自負するソン・インファさんが、始興のまた別の魅力を伝える。

エコ農法で収益「アップ」、体験型農業の準備に大忙し

ふさふさと実ったブドウの木の下には烏骨鶏3、4羽が並んで歩きながら餌を探している。キム・フンデ(54)さんが無農薬ブドウなので洗わずに食べても大丈夫だと言いながら、収穫したばかりの3色ブドウ一皿を差し出してくれ、どこからか牛の鳴き声が聞こえる。

君子洞にあるキム・フンデさんの農園は少し独特である。農園に入れば中央にあるブドウ園が真っ先に目に飛び込んでくるが、小さな子どもほどもある巨大カボチャとツルレイシが周辺を飾っている。ブドウ園の横にはロバ2頭と牛5頭、ヤギ、ニワトリがいる。

キム・フンデさんは「都市の人々が癒されるための体験型農業」を目指していると言う。彼は始興の代表的な特産物である3色ブドウ(黒、青、赤の3色)と家畜を組み合わせ、エコ農法および体験型農業を試みている。

「ブドウ狩りをしてワインを作り、ロバに乗って遊びながら楽しくリラックスした時間が過ごせるように構成しました」

牛の糞尿はそのまま堆肥として使用される。市販の飼料ではなくトウモロコシの茎や豆の茎などを食べさせるため、糞尿が土壌を元気にして農薬を使用しなくても大粒のブドウが実る。このように育てた無農薬3色ブドウは、一般ブドウの二倍の価格で売れる。贈り物用に

1

1_ キム・フンデさん農園のロバ
2_ 始興の代表的な特産物、
ブドウを見ているキム・フンデさん
3_ セリ畑のソン・インファさん
4_ キム・フンデさん農園のニワトリ

予約する人が多く、販売にも気を遣わない。
キム・フンデさんは今春発足した始興市農村体験研究会の会長を務めている。
「現在は養蜂をしていたりドジョウやブドウなどを育てている会員が25人います。しっかりとした体験をしようとすれば、一日に2～3農家を続けて訪問できるように様々な農家がネットワークを築くことが重要ですから」
市民がわざわざ遠くに行かなくても農村を体験しながら余暇が楽しめるように、始興の農夫たちが今、知恵を絞り合っている。

「ハネドルセリ」15年目… 高品質で高所得

月串洞タルウォル村から抜け出て狭い道を車で5分行けば、民家がなく両側に低い山が見える場所にソン・インファ(55)さんのセリ畑がある。9万㎡(2万7000坪)の広い農地を所有する大農である。セリだけを栽培して15年目。「ハネドル」という始興市特産物ブランドで可楽農水産物市場に卸している。
夜9時30分の競売開始時間に合わせて毎夕農場を出発するセリは、4kg単位で包装された箱が400箱に及ぶ。生産量も多い上、競売でいつも高値が付くため、周りからうらやましがられる中で高所得を上げている。
「セリ栽培の半分は水」だというソン・インファさんは「周辺に汚染源がなく、山から流れてくる地下水だけでセリを育てているので良い農産物が生産できる」と述べた。その上、セリは1年に5回まで収穫が可能なため、まじめにコツコツ働きさえすればお金になるという。最近は今年に入ってから4回目の収穫をしているところである。
ハネドルセリは全部で30軒の農家が栽培している。始興市農業技術センターのチョン・ヒョンハ都市環境農業チーム長は「始興のセリ畑は約75haで首都圏で最も広い。富川と仁川の都市開発に伴い、10年前から始興に移住して農業をしている人が多い」と述べた。首都圏以外では全州、羅州、釜山、統営など、主に南側地方でセリ栽培をしているが、ソウルとの距離が遠いため競争力が弱い方である。セリは鮮度が生命であるため、輸入も考えることすらできない。
「農業に違いはありません。価格があまり高くないときも、ひたすら一生懸命働いて良い商品を出してこそ生き残れます。それから、焦らずに時を待てなければなりません」
解毒作用に優れていることが知られてから人気を増しているセリ農家のソン・インファさんが語る「戦略」である。

夏の思い出がほんのりと赤く染まる

梅花洞 鳳仙花祭り

梅花洞は始興市の北東側に位置している。面積の45%が農耕地で戸曹原(ホジョボル)があり、伝統的に稲作が発達している。それだけ住民間の結束が強く、独特な共同体文化を形成している。今後はアパートと住宅団地、梅花産業団地ができる予定である。次第に都市化が進んでいるが、梅花洞の共同体文化を守ろうとする住民の努力も増している。鳳仙花祭りは小さな洞単位の祭りではあるが、住民が中心となって行われるという点で大きな意味がある。自分の手で直接「幸せなまち」を築いている梅花洞住民と交わり、紅色の思い出づくりをしてみた。

鳳仙花の爪染めで昔の思い出にしみじみと浸る

真昼の熱気が徐々にとれはじめていた7月4日午後5時。梅花洞小公園に住民が三々五々集まってくる。ずっと継続的に祭りを開いてきたため、特に宣伝をせずに横断幕を張るだけで約束でもしたかのように人が集まる。

一年にたった一度、鳳仙花が咲く頃に開かれる「鳳仙花祭り」。普段は静かで閑寂としていた公園が、この日ばかりは隅々まで充実した楽しさで満たされる。餅つきをすれば香ばしいきな粉をまぶした餅インジョルミが食べられ、乾燥わかめを水で戻して作った小さなわかめプールでは、子どもたちがドジョウつかみに夢中。真昼の暑さを吹き飛ばしてくれる冷たい小豆かき氷づくりコーナーは、早くも長い行列ができている。

しかし、子どもと大人の区別なく一番混んでいるのは、鳳仙花で爪を染めてくれる場所。

「初雪が降るまで鳳仙花で染めた色が爪に残っていれば初恋が叶うそうですよ」

細かくすりつぶした鳳仙花の花びらを小さな手の爪にのせて固定し、子どもたちが天真爛漫に笑う。

韓国の歳時風俗である鳳仙花の爪染めは、きれいに見せようとするというよりは病魔を防ぐためのものだった。厄神が赤色を恐れるため、鳳仙花で爪を赤く染めれば追い払えるという民間信仰から生まれた風俗である。

鳳仙花の花びらを指10本にていねいに縛りつけてくれるのは、他でもない町内のお年寄り。

「若い頃は私が家内の爪を鳳仙花で染めてやったものだよ。今考えれば本当に楽しかった。こうやって子どもたちの爪を鳳仙花で染めていると改めて昔を思い出すよ」

80歳を過ぎたおじいさんの目には、花で爪を染めようと待っている子どもたちが可愛くて仕方ない。

10年間続いている鳳仙花祭り

「鳳仙花祭り」は10年前、市立梅花保育園(院長:キム・ウンスク)の先生と子どもたちが使われていなかった空間に鳳仙花を植えたのがきっかけだった。鳳仙花の花を摘んで互いの爪を染め合うことによって始まった素朴な祭り。保育園を卒業した園生は中学生になっても忘れずに祭りに来る。住民も高い関心を示した。

梅花洞住民は素朴ながらも美しい鳳仙花祭りに一緒に集まり、おいしいものを食べたり小さな公演を見たりしながら交わる。また、チヂミやトッポッキ(餅の甘辛炒め)などを作って販売し、その収益金は困難に見舞われている住民を助けるのに使われる。

毎年7月になると家族みんなで公園に来て鳳仙花にまつわる思い出を作ることが自然と行われ、いつの間にか鳳仙花祭りは住民みんなが参加する梅花洞の名物として根づいた。

特に、今年は梅花洞地域のメチェギ敬老堂(会長:イ・ジョンチャン)の「希望のまち事業」と連携してプログラムが豊富となり、意味は一層特別なものとなった。敬老堂のお年寄りが率先して祭りのために歌と振り付けを練習し、暇あるごとに鳳仙花を摘んで祭りの準備をした。お年寄りも毎日敬老堂の中でだけ過ごしているため、祭りに出てきて楽しそうで歌を口ずさんでさえいるという。

子どもからお年寄りまで3世代が一緒に笑って楽しむ梅花洞「鳳仙花祭り」。鳳仙花祭りを一度も欠かさずに10年間続けてこられた理由は、自分の住んでいるまちと隣人への愛情ゆえではないだろうか。ささやかではあるが、内容が濃く人情あふれる鳳仙花祭り。梅花洞の大きな誇りである。

※鳳仙花祭りの生き生きとした映像は始興放送(www. siheung.go.kr/shtv)でもご覧になれます。

足元を照らす ロボット看板と 烏耳島をぶらつく

最近、烏耳島が改めて注目されている。観光客と住民がより一層便利に烏耳島を楽しめるように配慮した烏耳島景観デザイン「風の吹く日は烏耳島に行こう」が「2014大韓民国景観大賞」を受賞した。また、始興地域の大学が産学協力で烏耳島商圏の経済活性化に一助となるべく、韓国で初めてロボット看板を製作して披露した。年を重ねるごとに変化し、その価値を輝かせる烏耳島。その現場に行ってみた。

価値を認められた烏耳島景観デザイン

始興市が7月11日、第2回「国土景観の日」を迎えて大韓建築士協会大講堂で行われた「2014大韓民国景観大賞」で優秀賞を授与された。国土交通部主催の「大韓民国景観大賞」は、国土景観分野最高の賞で、3回にわたる厳格な審査を経て与えられる栄誉ある賞。海岸景観の優れた烏耳島地域の特色を生かした住民参加型デザイン「風の吹く日は烏耳島に行こう」は、観光客の便宜を図った海岸散策路と大小の展望台、中心テーマ路、歩行者道路などが、昔の烏耳島の歴史と生命が感じられる空間として再現され、新たなストーリーとコミュニティを引き出したと評された。

特に、数字が表示されていて道を探しやすい統合街路灯は、効率的なアイデアが光っており、高得点が付いた。始興市は今後も様々な方式を導入して「市民と共に作っていく景観デザイン」を継続的に推進する計画である。

烏耳島に登場した韓国初のロボット看板

日が沈みかけてきた頃、徐々に海辺にぎっしり並ぶ看板に明かりが点き、昼とはまた違った華やかさで観光地の魅力を放つ烏耳島。夕日が美しく、赤灯台と海鮮うどんを思い出す烏耳島に最近、新しい見どころができた。

烏耳島水産物直販場の前を歩いていると、どこからか道を照らしてくれる看板がある。カニの形をしたこの看板は、センサーで人の動きを追いながら明かりを照らす。通り過ぎる人を感知して波の音を出したり、うどんを食べる音を聞かせたりするロボット看板も珍しい。

大きな手につかまれたままピチピチ動くヒラメも、焼き網でおいしそうに焼かれるエビも、いくつもの足が自然に動くタコも、すべてロボット看板になって登場した。首都圏から比較的近い場所にある烏耳島を特色ある観光地に生まれ変わらせるとともに、地域経済も活性化できるように大学が積極的に乗り出した結果物である。

韓国産業技術大学産業デザイン工学部メカトロニクス工学科の教授たちが知恵を出し合い、1年6ヶ月間準備した10種類のロボット看板が、烏耳島の海辺にある烏耳島水産物直販場の外壁に設置された。韓国産業技術大学のチョ・ナムジュ、シム・ジェホン教授チームは、地域の特性に合うテーマで世界初のロボット看板・ロボットアート作品をデザイン・設計した。烏耳島水産物直販場に設置されたロボット看板は、韓国ロボット産業振興院の支援する2013ロボット試験普及事業によって(株)LPK、(株)アドジオ、韓国産業技術大学、JFコントロール、ビューアドデザインコンサルティングが共同参加して製作・設置し、ロボット産業の拡大普及のために5月に烏耳島水産物直販場に寄贈した。

烏耳島は今、見どころがあふれる新しい名所として多くの観光客と市民に末永く愛される準備をすべて終えた。今後、烏耳島がどのような姿で観光客の思い出の中に残るか楽しみである。

セウォル号犠牲者およびパク・チヨンさんの追慕祭

始興市民団体協議会が6月12日、始興市庁大会議室で「セウォル号犠牲者および義死者パク・チヨンさんの追慕祭」を開催した。
同追慕祭はセウォル号沈没事故の犠牲者・行方不明者遺族の痛みを市民が分かち合い、義人の犠牲を哀悼しながら、身を殺して仁をなす崇高な精神を忘れることなく称えるために行われた。
追慕祭は犠牲者の遺族と各機関および団体の代表、一般市民などが参加し、落ち着いた雰囲気の中で進められ、追慕映像の上映と献花式、追慕演奏、追慕葉書への書き込みなどが行われた。
ヤン・ヨファン協議会長は「まだ見つかっていない行方不明者の帰還を切実に祈る」とし、「始興市民みんなが隣人の痛みを分かち合い、犠牲精神を追慕する意義深い行事になればと思う」と述べた。

中国吉林省吉林市副市長の始興市訪問

中国吉林省吉林市副市長を含めた交流団4名が、7月に始興市を訪問した。今回の訪問は吉林市経済中核事業の一つである中国-シンガポール食品経済特区の広報と関連して、4泊5日の日程で行われ、今後の始興市との緊密かつ継続的な国際交流の方法を模索すべく始興市長と会談し、ペゴッ新都市の建設現場を見て回った。始興市は管内中学・高校間の友好交流に関する話し合いにより、様々な青少年国際交流事業を継続的に推進する計画である。

始興市議会共生政治実践宣言文の採択

始興市議会が7月10日に『共生政治実践宣言文』を採択し、市民との約束を必ず実践する議会になることを市民の前に誓った。
始興市議会は全市議会議員が市民の代表者として公共の利益を優先し、市民の求める望ましい議員像の確立と効率的な議会活動によって市民と共にする信頼される議会政治を実現すべく、共生政治実践宣言文を採択するようになったと述べた。
宣言文には、市民との約束を守る議員としての品位維持と倫理綱領精神の実践、始興市発展のためのビジョン提示など、市民中心の議会活動内容と生産的かつ品格ある議会の実現、「6対6」議席構成に込められた市民の意思実践により、共生政治を必ずや実践するという内容が盛り込まれた。
始興市議会は共生政治実現の出発として7月10日午後に第7代議会前半期議長団を構成し、7月11日に開院式を行って4年間の議会活動に突入した。

始興市議会第7代前半期議長団の構成

始興市議会が第7代前半期議長団を構成した。議長には再選の尹泰鶴(ユン・テハク)議員が選出された。7月10日に開かれた第214回臨時会2次本会議で、尹泰鶴議員は全体議員12名のうち11名の賛成によって任期2年の前半期議長になった。副議長には満場一致で朴善玉(パク・ソンオク)議員が選ばれた。前半期議長に選ばれた尹泰鶴議員は「市民の目となり、耳となって考え、ひたすら市民の代理人として議長職を遂行してまいります。議員12名の力と知恵を合わせ、真に市民のための民主主義を実現できるように全力を尽くします」と当選の感想を述べた。